

第4室 武器・武具 展示解説

N-133 梓弓（あずさゆみ）

梓（カバノキ科の落葉高木・ヨグソミネバリ）を丸木（まるき）のまま皮を削り、全体に漆をかけて仕上げた古代の弓です。天保13年（1842）の『御宝物図絵（ごほうもつずえ）』には、N-134 六目鏑矢（むつめのかぶらや）、N-135 箭（や）、N-136 利箭（とがりや）とともに聖徳太子が物部守屋（もののべのもりや）との合戦に用いたと伝えられています。平安時代後期（12世紀前半）の『七大寺巡礼私記（しちだいじじゅんれいしき）』や鎌倉時代の『古今目録抄（ここんもくろくしょう）』にも記述があり、当時すでにこの寺伝が成立していたことがわかります。

N-134 六目鏑箭（むつめのかぶらや）

法隆寺献納宝物には、N-134 六目鏑箭、N-135 箭（や）、N-136 利箭（とがりや）の3種の箭が合わせて7本あります。箒（やがら。軸のこと）はいずれも竹をまっすぐに成形し、漆を拭（ふ）きこんでいます。

本品は、射ると大きな音を立てて飛ぶ鏑矢で、6つの孔（あな）をあけた角（つの）製の鏑に、大きな三角形の尖根（とがりね）の鏃（やじり）をつけています。弓弦（ゆづる）をつがえる筈（はず）は牙製です。

N-135 箭（や）

箒（やがら）の先に径1.6cm程の角（つの）製の杵形（きねがた）をつけています。この杵形には深い彫り込みがあり、現在は欠失していますが、この溝に鉄製の鑿形（のみがた）を挟んでいたと考えられます。鏃（やじり）の先端が尖っておらず、練習などに用いた平題（いたつき）と呼ばれる形式の箭です。

N-136 利箭（とがりや）

5本とも同形で、いずれも小さな三角形の鏃（やじり）をつけており、天平勝宝8歳（756）の『東大寺献物帳（とうだいじけんもつちょう）』（国家珍宝張）にみえる「三稜（みかど）の小爪懸（こつまがけ）」という鏃に該当すると考えられます。箒（やがら）の口巻（くちまき）や羽をつけた末矧（うらはず）には黒漆（くろうるし）の上に金粉をわずかに蒔（ま）いていたことが認められ、羽の欠損の位置から三立羽（みたてば）であったことがわかります。

N-139・N-140 壺鐙（つぼあぶみ）

N-139・N-140 付属 鉸具付心葉形杏葉（かこつきしんようけいぎょうよう）

鐙は馬に騎乗する際に足を踏み懸ける馬具で、鞍の両脇に垂らします。古代の鐙には輪鐙（わぶみ）と壺鐙がありますが、壺鐙は足先の覆いをつけたもので輪鐙より遅れて出現しました。金属製の壺鐙はそのなかでも新しい形式のものです。

法隆寺献納宝物には一双と一隻（せき）の壺鐙があります。いずれも鉄製で、壺と縁金（ふちがね）は別作りで、縁金に壺をはめて鉄鉸で留めており、全体に漆を塗っていた可能性があります。

付属する金銅（こんどう）製の鉸具付心葉形杏葉は、鐙とともに馬具のセットを構成していた可能性も考えられます。

天保13年（1842）の『御宝物図絵（ごほうもつずえ）』には聖徳太子が物部守屋（もののべのもりや）を討伐した時に用いたとの言い伝えが記されています。

N-141 鋸（のこぎり）

厚手の鋸身（のこみ）は先端の刃を欠き、6個の角孔を並列して穿（うが）っています。刃は現状で17個が残り、前後に「歯振（あさり）」をつける横挽（よこび）き鋸です。木柄（もくえ）には鉤（はばき）をつけ、目釘孔（めくぎあな）を通し、その両端を鉄座金具（ざかなぐ）でからくり留めしています。肉厚な刃から実用品か儀礼用か明らかではありませんが、N-142 鎌とともにこの種の道具類としては伝世最古の遺品とみなされています。

N-142 鎌（かま）

身（み）が三日月形をした大型の鎌です。身の基部の茎（なかご）に2個の目釘孔（めくぎあな）を穿（うが）っています。身と目釘孔の位置が合わないので、木柄（もくえ）は共柄ではないと考えられます。法隆寺五重塔の相輪（そうりん）の基部に本品に似た鎌が雷避けとして据えつけられており、聖徳太子が法隆寺造立（ぞうりゅう）の際に用いたとの寺伝があります。N-141 鋸（のこぎり）と同様、実用品か儀式用か明らかではありませんが、法隆寺造営との密接な関係がうかがえます。

N-137 彩絵胡籙（さいえのやなぐい）

矢の先を揃えて収める方立（ほうだて）に籙（やがら）を寄せかける長い背板をつけた胡籙という矢の収納具です。背板の上縁の高頭（たかがしら）は角を丸くして、全体的に覆輪を廻（めぐ）らし、矢を束ねる受緒（うけお）や懸緒（かねお）を通す孔（あな）を穿（うが）っています。現状では剥落（はくらく）が著（いちじる）しいのですが、かつては纒綯彩色（うんげんざいしき）で花文（かもん）などが描かれていたようです。N-134 六目鐙箭（むつめのかぶらや）、N-135 箭（や）、N-136 利箭（とがりや）を入れたという寺伝があります。